

令和 2 年 5 月 25 日現在

機関番号：32401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K17343

研究課題名(和文)心理専門職による研究知見の効果的生成・臨床的活用・社会的発信に関する研究

研究課題名(英文)Producing knowledge, clinical applications, and public dissemination of psychological research by clinical psychologists

研究代表者

新井 雅(Arai, Masaru)

跡見学園女子大学・心理学部・准教授

研究者番号：80750702

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、科学者-実践家モデルの観点から、心理支援に携わる心理専門職が「新たな研究知見を生成するための研究活動に関与すること」、「研究知見や研究の知識・技能を活かして臨床活動を行うこと」、「心の健康に関わる心理学的知識・知見を社会の多様な人々に発信・普及すること」に対して、日本の心理専門職・大学院生がどのような認識・態度を有しているのか、その実態や関連要因を調査し、これらの専門活動を促進する教育訓練プログラムの作成と効果検討を行った。心理専門職が科学者や研究者としての役割・機能をも果たすために必要となる教育訓練やサポート体制のあり方、今後改善されるべき現実的な諸課題等を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、心理支援に携わる心理専門職の科学者・研究者としての役割に焦点をあて、研究活動を基盤とした多様な専門活動の発展可能性について検討した。本研究で得られた様々な知見や成果は、臨床活動に有益な知見をもたらす研究活動、科学的な研究知見・技能・態度を活かした効果的な臨床実践、人々の心の健康に寄与する知識や知見の社会的普及のさらなる発展・推進に貢献すると考えられる。また、研究活動を通してこそ、心理専門職は学術的心理学とのつながりを持つことができる。本研究の成果は、基礎と臨床の対立構造を越え、心理学分野の多様な研究領域を活かした心理専門職による専門活動の発展に向けた一助となり得ると考える。

研究成果の概要(英文)：The following research-based professional activities are required of professional clinical psychologists: (1) Producing important research findings on psychology based on a positive attitude to research, (2) An open attitude regarding different psychological studies and promotion of evidence-based practices in psychology, and (3) Activities for public dissemination of psychological knowledge and research findings. In this study, the characteristics and factors influencing psychological research activity, attitude toward evidence-based practice in psychology, and attitudes toward public dissemination of psychological knowledge among clinical psychology graduate students and clinical psychologists in Japan were investigated. Then, the effect of training programs for graduate students learning research-based professional activities by clinical psychologist. Some indicators were pointed out to develop future researches on professional activities based on research of clinical psychologists.

研究分野：臨床心理学 学校心理学

キーワード：心理専門職 科学者-実践家モデル 研究活動 エビデンスに基づく心理学的実践 心理学的知識の社会的普及

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 1. 研究開始当初の背景

心理学は実証的な研究活動が重視される学問体系である。心理援助に携わる心理専門職も、臨床技能に加えて研究法を学び実践することは重要な活動の1つとされる。しかし、日本の心理専門職には、臨床実践と研究活動の双方を大切に活動する者は決して多いとは言い難い。そのため、心理専門職が研究活動とその専門性の1つとしてどのように位置づけ、科学者や研究者としての役割・機能をどのように果たしていくことができるのかを再考することは重要な課題と考えられる。特に日本では2017年9月に公認心理師法が施行され、心理専門職に対する社会的な期待は高まっている。臨床実践に傾倒しがちな日本の心理専門職全体として、研究活動への意識を高め、それを基盤とした多様な臨床的・社会的活動へとつなげる試みを探求することが、さらなる社会的貢献を果たすために必要不可欠であると考えられる。

科学者-実践家モデル(**scientist-practitioner model**)やエビデンスに基づく実践(**Evidence Based Practice : EBP**)の観点から、心理専門職には、研究を通して新たな知見を生成すると共に、科学的な思考・手続きや実証的研究知見を臨床実践に活かすことがあげられる(**Kahn & Schlosser, 2014**)。先行研究では、研究活動を促進する大学院教育の検討(**Research Training Environment : RTE**)や(e.g., **Gelso et al, 1996, 2013**)、心理専門職等のEBPに対する態度の調査、EBP活動の展開に影響を及ぼす要因の探索が行われ(e.g., **Lilienfeld et al., 2013 ; Nelson & Steele, 2007**)、研究知見の生成や臨床的活用を促進する取り組みや教育訓練のあり方が議論されている。さらに、研究で得られた知識や知見について、論文執筆や学会発表等による公表だけでなく、一般の人々や関係者に広く普及することの重要性も指摘されている(**Kaslow, 2015**)。実際に、日本の公認心理師法においても「心の健康に関する知識の普及を図るための教育及び情報の提供を行うこと」が心理専門職の果たすべき役割の1つとされており、多様な方法・媒体を用いて社会の様々な人々とつながる機会が増えている現代だからこそ、心理専門職は研究知見の社会的な普及をどのように考え、実践できるのかを議論する必要がある。

以上を踏まえると、研究の知識・技能・態度を基盤として研究知見の生成を行い、臨床実践で多様な研究知見を活用し、広く社会に向けて研究知見を普及させることが、心理専門職による研究活動を基盤とした多様な専門的活動と捉えることができる。日本においても、科学者-実践家モデルやEBP、研究活動の重要性は従来より指摘されてきたが(e.g., 今田, 1996 ; 岩壁, 2013 ; 下山, 2001 ; 丹野, 2005)、上記3点に関わる活動について、現場の心理専門職や大学院生が有する認識・態度の実態や関連要因を調査しつつ、心理専門職の教育訓練やサポート体制等の在り方について実証的に検討した研究は十分に蓄積されていない。諸外国と日本では文化的背景や心理専門職の訓練モデル等にも違いがあるため、日本に即した調査・検討が必要である。

## 2. 研究の目的

以上の背景・研究動向を踏まえ、本研究では、心理専門職による「新たな研究知見の生成につなげるための研究活動」、「研究知見・研究技能を活かした臨床実践」、「心の健康に関する心理学的知識・知見の社会的な発信・普及」に関して、日本の心理専門職・大学院生が有する認識や態度に関わる実態と共に、それらに関連・影響する諸要因を調査した上で、心理専門職の養成・教育訓練やサポート体制の在り方について検討することを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1)研究1

#### 目的

日本の心理専門職や大学教員、大学院生を対象に、「新たな研究知見の生成につなげるための研究活動」、「研究知見・研究技能を活かした臨床実践」、「心の健康に関する心理学的知識・知見の社会的な発信・普及」の活動に対する考えや認識を多面的に調査し、今後の研究・調査につなげるための基礎的・予備的データを探索的に収集することを目的とした。

#### 調査対象者

臨床心理士指定大学院の大学院2年生43名(男性8名、女性35名、平均年齢26.56( $SD=7.05$ ))、臨床心理士資格を有し、臨床心理士養成に携わる大学教員17名(男性13名、女性4名、平均年齢46.53( $SD=10.54$ ))、臨床心理士資格取得・取得見込みの心理専門職57名(男性9名、女性48名、平均年齢32.28( $SD=9.21$ ))、計117名(男性30名、女性87名)を対象とした。

#### 調査内容

性別、年齢、臨床領域や理論的志向性のほか、諸外国の先行研究(e.g., **Aarons, 2004 ; Gelso et al., 2013 ; Kaslow, 2015**)を参考に、選択式・自由記述式の質問項目を作成・実施した。

第一に、大学院生と心理専門職には、研究活動への興味・自信の程度などを5件法で尋ね、評定理由を自由記述にて尋ねた。さらに、どのような教育、研究指導、研究環境・制度が整っていれば、大学院生の研究に対する興味・関心、自信が高まると思うかを大学院生に自由記述で尋ねた。心理専門職には、心理専門職による研究活動が活発に行われるようになるための教育・研修、環境・制度を自由記述で尋ねた。大学教員にも同様の内容を自由記述で尋ねた。

第二に、大学院生、心理専門職、大学教員それぞれに、臨床心理学研究や基礎心理学研究から得られる知識や知見、研究に必要な知識・技能が臨床実践を進める上で役立つと思うかどうかを5件法で尋ね、その評定理由を自由記述にて尋ねた。さらに、大学教員と心理専門職には、臨床実践に携わる心理専門職が研究から得られる知識や知見を臨床実践により良く活かすことがで

きるようになるためには、どのような取り組み・条件が必要だと考えるかを自由記述にて尋ねた。

第三に、心理学的知識・知見の社会的普及に関わる質問項目として、大学教員と心理専門職を対象に、一般の人々や児童生徒・大学生、行政機関等に、多様な方法(図書・雑誌、講演・研修、新聞・TV、Web・SNS等)を用いて心理学的知識を発信・普及する取り組みについて自由記述にて回答を求めた。

#### 調査手続き

郵送法・縁故法を用いて、同意を得た対象者に上述の質問を用いた **Web** 調査を実施した(調査時期 **2017** 年 **9**~**11** 月)。研究者が所属する大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

### (2)研究2

#### 目的

先行研究や【研究1】で得たデータをもとに、大学院(修士・博士前期課程)の研究に関わる教育訓練環境や臨床実践に関するエビデンスへの態度等に関わる尺度を試験的に作成し、心理専門職や大学院生を対象に、「新たな研究知見の生成につなげるための研究活動」、「研究知見・研究技能を活かした臨床実践」の認識や態度及び関連要因について調査することを目的とした。

#### 調査対象者

心理専門職(臨床心理士資格取得済み・見込み)と臨床心理士指定大学院(修士・博士前期)の大学院生 **431** 名から有効回答を得た。心理専門職 **170** 名(男性 **44** 名、女性 **126** 名、平均年齢 **34.7**、**SD=8.8**)、大学院生 **261** 名(男性 **51** 名、女性 **210** 名、平均年齢 **26.5** 歳、**SD=7.3**)であった。

#### 調査内容

性別、年齢、臨床領域等の基本属性・事項のほか、以下 **3** 点についての質問項目を実施した。

第一に、心理学の卒業論文執筆経験の有無、修士論文での研究経験、大学院在学以前に卒業論文や修士論文以外で指導教員等の研究へ関与・補助した経験を有するかどうかを尋ねる質問項目(「その他の研究経験(大学院以前)」)などのほか、日本の大学院での研究に関する教育訓練環境の状況を尋ねる「研究に関する教育訓練環境尺度」、研究活動への興味・関心や自信、肯定的な研究体験、国内外の学会参加・発表や論文執筆経験等を尋ねる質問項目を実施した。第二に、**EBP** に関わる態度に関する質問項目として、「臨床実践に関するエビデンスへの態度尺度」を作成・実施した。第三に、心理臨床家志望動機(内的要因)尺度(上野・金沢, **2015**)を著者の許可を得て使用した。

#### 調査手続き

郵送法・縁故法により協力を依頼し、同意を得た対象者に **Web** 調査を実施した(調査時期 **2018** 年 **1**~**3** 月)。研究者が所属する大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

### (3)研究3

#### 目的

【研究1,2】で得たデータや知見をもとに、日本の心理専門職や心理専門職を目指す大学院生を対象に、「心の健康に関する心理学的知識・知見の社会的な発信・普及」を行う活動に対する認識や態度の実態と共に、その関連要因について探索的に調査・検討することを目的とした。

#### 調査対象者

心理専門職(臨床心理士資格取得済み・見込み)と、臨床心理士指定大学院や公認心理師養成大学院の大学院生(修士・博士前期課程)、計 **172** 名から有効回答を得た。心理専門職 **102** 名(男性 **24** 名、女性 **78** 名、平均年齢 **33.80**、**SD=8.87**)、大学院生は、修士 **1** 年が **10** 名、修士 **2** 年が **60** 名、計 **70** 名(男性 **16** 名、女性 **54** 名、平均年齢 **25.93** 歳、**SD=6.70**)であった。

#### 調査内容

第一に、心の健康に関する知識・知見の社会的普及に関わる質問項目として、(a)様々な対象者(例「患者・クライアント」「児童生徒・大学生」など)に、(b)多様な方法(例「講演会・研修会」「学校教育」「専門書・教科書」など)を用いて心の健康に関する知識・知見を普及する活動について、(c)どのような意識を有しているか(重要性、経験、意欲、自信、不安、教育訓練ニーズ)を5件法で尋ねた。

第二に、心理学の卒業論文執筆経験、卒業論文や修士論文以外で指導教員等の研究に関与・補助した経験を尋ねる質問(「その他の研究経験(大学院以前)」)のほか、【研究2】で作成された「研究に関する教育訓練環境尺度」(「肯定的な研究指導・サポート」「研究と臨床のつながりの学習」「研究・分析に必要な学習環境」「教員の研究活動への意欲」の **4** 因子 **24** 項目) 研究への興味・関心や自信、肯定的な研究体験、学会参加・発表や論文執筆経験等を尋ねる質問項目を実施した。

第三に、**EBP** に関わる態度に関する質問項目として、【研究2】で作成された「臨床実践に関するエビデンスへの態度尺度」(「研究知見・技能の臨床的有用性」「実証研究に基づく臨床実践への意識」「心理学分野の多様な知見や研究者への関心」の **3** 因子 **26** 項目)を実施した。

#### 調査手続き

縁故法により協力を依頼し、同意を得た対象者に **Web** 調査を実施した(調査時期 **2018** 年 **12** 月~**2019** 年 **1** 月)。本調査に際して、研究者が所属する大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

#### (4)研究4

##### 目的

【研究1~3】で得られた知見を踏まえて、臨床心理士や公認心理師を目指す修士課程の大学院生を対象に、臨床実践に寄与する臨床心理学研究法の学習と共に、科学者・実践家モデルに基づく心理専門職の研究活動や臨床活動および心の健康に関わる研究知見の社会的普及に関する学びを行う教育訓練プログラムの効果について、予備的に検討することを目的とした。

##### 対象者

臨床心理士指定大学院・公認心理師養成大学院の大学院生 10名(修士課程1年生)を対象とした(男性1名、女性9名、平均年齢23.87歳、SD=3.04)。

##### 実施方法

教育訓練プログラムは、文献研究、量的調査研究、質的調査研究、実験研究、事例研究、効果研究などの臨床心理学研究の方法論の学びと共に、心理支援に携わる心理専門職が科学者・研究者としての役割・機能をも果たすための専門活動の実際およびこれからの発展可能性について説明・発表・ディスカッションする内容として構成した(全15回)。

##### 調査内容

教育訓練プログラムの効果および大学院生がこれらを通して得た体験内容等を、量的・質的に検討するため、選択式及び自由記述式のWeb調査と面接調査を実施した。

選択式Web調査では、【研究2】・【研究3】の項目を活用した。また、「研究と臨床のつながりの学習」因子の項目を本プログラムの最終的な感想を尋ねる項目として修正して実施した。自由記述式Web調査では、心理専門職が研究知見を生み出す研究活動に関与・協力すること、研究知見や研究活動に関わる知識・技能・態度を活かして臨床活動を行うこと、心の健康に関わる様々な心理学的知識や研究知見を、社会の多様な子ども達・人々に発信・普及する活動に携わることにどのように考えるかを尋ねた。面接調査では、上述の自由記述式Web調査の回答内容について補足的に確認するため、各対象者に個別の面接調査を行った。

##### 実施時期・倫理的配慮

教育訓練プログラムや上述の調査の実施期間は2019年10月~2020年2月であった。研究参加は自由意思に基づき、研究協力の拒否や途中辞退等により不利益が生じることはないこと等について説明し、同意を得て実施した。本研究は研究倫理審査委員会の承認を得て実施された。

#### 4. 研究成果

##### (1) 新たな研究知見の生成につなげるための心理専門職による研究活動に関する成果

【研究1】から、日本の大学院生・心理専門職は、概ね、研究に興味・関心が無いわけではないものの、研究を進める際の自信は十分に持てていない傾向がみられた。臨床実践やクライアントの抱える問題の解決に貢献し得る研究知見を明らかにしたい気持ちを有している一方、研究法や統計分析などの知識や技能と共に、研究活動そのものの経験値や成功体験が不足していることへの不安や懸念を有している傾向が示された。研究に対する興味・関心、自信を高める大学院での教育訓練環境については、研究法や統計の教育を丁寧に行うこと、学生同士で情報・意見交換やサポートができる場や体制作り、指導教員や先輩等の研究補助等を通して研究に必要な知識・技能を学ぶ経験を積むこと、研究室や研究資料など研究に関わる設備や環境が整っていること、臨床活動と研究活動のつながりに関する学習経験の重要性に関する記述が多くみられた。

一方、現場の心理専門職による研究活動は、臨床実践に関わる業務に追われているがゆえに研究に時間を割く余裕が無かったり、研究に必要な設備や環境、経済的支援等も十分ではない点が、研究への関心・自信を減退させる要因になっている可能性が示された。職場の理解や、時間的・設備的・経済的な環境・支援が整うこと、研究活動に関する仲間や関係者、指導者の必要性、研究を行うことがいかに臨床活動に貢献し得るのかについての学びの機会の必要性が示唆された。

【研究2】では、【研究1】で得られた基礎データをもとに、「研究に関する教育訓練環境尺度」から「肯定的な研究指導・サポート」「研究と臨床のつながりの学習」「研究・分析に必要な学習環境」「教員の研究活動への意欲」の4因子24項目が見出された。大学院生と心理専門職ごとに違いがみられたものの、全体的には、研究と臨床のつながりの学習体験や研究・分析に必要な学習環境の充実、教員の研究活動への意欲といった大学院での教育環境のほか、可能な範囲で卒業論文・修士論文以外の研究に関与する経験や、研究活動を通して成功体験を積み重ねることが、研究活動やEBPへの態度に直接的・間接的に重要な役割を果たしている可能性が示された。

##### (2) 心理専門職による研究知見・研究技能を活かした臨床実践に関する成果

【研究1】から、研究に関する知識・技能や基礎心理学の多様な研究知見が、臨床実践に直接的・間接的に役立ち得るものと認識している大学院生・心理専門職ほど、EBPへの理解や肯定的態度も高い傾向にあった。また、大学院生のデータでは、過去に心理学の卒業論文を執筆した経験を有する者ほど、EBPへの肯定的な意識が高い可能性が示された。試行錯誤を重ねながら卒業論文に関わる研究を進め、実際に論文を執筆する経験こそ、科学的かつ実証的な思考や手続きを身につける重要な機会となり得るものであり(丹野, 2017)、本研究の結果は、このような経験がEBPへの前向きな姿勢に関連している可能性を示唆するものと考えられる。さらに、EBPに関わる教育訓練の機会と共に、その実践を継続的に支える体制や環境づくりを通して、臨床心

理学を含む多様な心理学分野の研究知見や研究活動そのものの知識・技能が、いかに臨床実践で役立ち得るかということ、心理専門職自身が実感できるような取り組みの必要性が示された。

【研究2】では、【研究1】の基礎データをもとに、「臨床実践に関するエビデンスへの態度尺度」(3因子26項目)を作成した。大学院生・心理専門職ごとに多少の違いはみられたものの、臨床実践に関わるエビデンスへの態度には、大学院での研究と臨床のつながりの学習体験、教員の研究活動への意欲、研究活動への興味・関心や自信、EBPを要請する環境が関連している傾向が示された。心理専門職によるEBPの展開は、研究の技能・態度を育成する教育訓練を通して期待される成果の1つでもあり(Kahn & Schlosser, 2014)、臨床心理学と基礎心理学のインターフェースの重要性(丹野, 2005)などを踏まえると、研究の教育環境等の諸変数から、臨床心理学以外の多様な心理学分野の知見や研究者への関心に有意な関連が確認された点も注目し得る結果であった。実証的な心理学研究に関わる学びを積み重ね、必要な教育環境を設定することにより、心理専門職による研究知見・研究技能を活かした臨床実践を促進し得る可能性が示された。

### (3) 心の健康に関する心理学的知識・知見の社会的な発信・普及に関わる成果

【研究1】では、心理学的な知識の発信・普及に関連した活動経験を有する心理専門職や大学教員の自由記述から、実際の活動内容は様々ではあったものの、類似した難しさや不安・懸念を抱えている可能性が示された(例: 専門的内容を平易に伝達すること、誤解や傷つきが生じないような内容、人々の多様な興味・関心、ニーズ等に適した情報発信等の難しさ)。それらの難しさを抱えながらも、正確さ・厳密さを大切にしつつ可能な限りわかりやすく、日常生活や具体例に即したかたちで伝達すること、楽しさや興味を引くような内容、誤解や傷つきを与えないような表現を心がけること、対象者・関係者の関心やニーズを把握した上で伝達する内容を選定すること、自らの専門性を自覚しその範囲内で活動を行うことの重要性などが示された。

【研究3】では、【研究1】【研究2】を踏まえ、計172名の大学院生・心理専門職を対象に調査を行った結果、心理専門職・大学院生共に、心の健康に関わる心理学的知識や研究知見の社会的普及に関わる活動の重要性を認識し、教育訓練ニーズを比較的高く有する傾向が示された。一方、それらの活動に関与する意欲や自信、経験値などは普及する対象や方法に応じて多様であった。さらに、大学院生に関しては、特に大学院での研究と臨床のつながりの学習体験や教員の研究活動への意欲が高いほど、そして、心理専門職では、研究活動への自信や心理学分野の多様な知見や研究者への関心が高いほど、社会的な普及に対して肯定的態度を有している傾向が示された。心理学的知識を生み出すための研究活動やEBPに関わる取り組み・教育訓練を充実させていくことが、心の健康に関する知識・知見を社会の多様な人々により良く発信・普及する態度を醸成するための基盤となり得る可能性が示された。

### (4) 臨床心理士・公認心理師を目指す大学院生に対する教育訓練プログラムの効果

【研究4】では、【研究1~3】で得られた知見・成果を踏まえ、教育訓練プログラムを試験的に作成し、大学院生10名を対象に、その効果を量的・質的に検討した。対象者数が少なく、統制群や待機群等を設けていない事前-事後テストデザインに基づく予備的検討に留まるため、結果の解釈には慎重である必要があるものの、全体的には概ね、大学院生は臨床活動と研究活動のつながりに関する学習を体験し、科学者-実践家モデルに基づく心理専門職の専門活動および心の健康に関わる研究知見の社会的普及に関する学びが進められた。同時に、心理専門職が担うべきこれらの諸活動に対して様々な不安や現実的に想定される課題なども面接調査にて語られた。本プログラムの趣旨に関する学びが効果的に進められたがゆえに、一方では、これらの活動に対する難しさや責任の重さ、課題等が、より現実的なかたちで想起された可能性が考えられる。

### (5) 本研究のまとめと今後の展望

本研究では、科学者-実践家モデルの観点から、心理支援に携わる心理専門職による研究活動を基盤とした多様な専門活動の発展可能性について検討した。各研究それぞれに限界や課題点はあるものの、本研究で行われた種々の調査研究や教育訓練プログラムの効果研究を通して、科学者や研究者としての役割・機能をも果たす心理専門職の養成・教育訓練、サポート体制に必要な要素や取り組み、今後改善されるべき様々な現実的な課題等が明らかにされた。

今後のさらなる展望を指摘する。まず、本研究で主軸となった調査研究のみならず、研究活動を基盤とした多様な臨床的・社会的活動の実際例に基づく実践研究を詳細に進めることが必要である。また、大学院教育のみならず、学部時代の心理学教育から大学院修了以降にかけて一貫した教育訓練やサポート体制を構築する手立てを探索し、それらを心理専門職の養成カリキュラムや継続研修にどのように反映し得るのか検討することが必要である。さらに、臨床実践を中心とした活動を行う心理専門職と、臨床と研究の両面を重視して活動する心理専門職のうち、日本では前者に相当する心理専門職が多数を占める状態は今後も継続すると予想される。その意味では、後者の心理専門職は本研究で議論した多様な活動を積極的に先導しつつ、実践重視型の心理専門職(臨床現場)と心理学研究者(学術研究)、社会の人々との間をつなぐ役割が求められる。心理専門職一人ひとりの個性や立場、専門の多様性を考慮しつつ、相互の役割分担や協働・協力関係に基づく研究活動の展開のあり方を検討することも、今後は必要になると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 新井 雅	4. 巻 36
2. 論文標題 心理専門職による研究知見の効果的生成・臨床的活用・社会的普及に関する展望	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心理臨床学研究	6. 最初と最後の頁 657-667
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新井 雅	4. 巻 1
2. 論文標題 心理専門職による研究活動を基盤とした臨床的・社会的活動の展開に関する探索的検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 跡見学園女子大学心理学部紀要	6. 最初と最後の頁 47-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新井 雅	4. 巻 37
2. 論文標題 心理専門職・大学院生の研究活動とエビデンスに基づく実践に関わる要因の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 心理臨床学研究	6. 最初と最後の頁 559-570
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新井 雅	4. 巻 2
2. 論文標題 心理臨床家志望動機の類型に応じた研究活動およびエビデンスに基づく実践への態度に関わる要因の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 跡見学園女子大学心理学部紀要	6. 最初と最後の頁 9-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 新井 雅
2. 発表標題 心理専門職による研究活動を促進する教育訓練のあり方に関する探索的検討
3. 学会等名 日本心理臨床学会 第37回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 新井 雅
2. 発表標題 心理専門職による研究知見の臨床的活用のあり方に関する探索的検討
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第44回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 新井 雅
2. 発表標題 心理専門職による研究知見の社会的普及に関する探索的検討
3. 学会等名 日本カウンセリング学会 第51回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masaru Arai
2. 発表標題 A perspective on collaboration based on diversity in psychology for promoting social contribution by psychologists
3. 学会等名 The 31st International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

新井 雅 臨床心理学・最新研究レポート シーズン3(第15回) 臨床現場において心理専門職が必要とする研究技能、臨床心理学、19巻、2019、251-255.

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----